

『地域におけるシングルマザーの支援を介して地域に助け合いの輪がまわるプロジェクト』

■母子家庭の背景

現在の日本において、3組に1組が離婚しているという実情がある。離婚率は2012年をピークに徐々に減少傾向がみられるが依然として離婚率の高さが目立つ。離婚原因として、不景気による経済的生活苦、女性の社会進出、若年層の早期結婚、性格の不一致、暴力、家族との折り合い、異性関係などがあげられ、時代、社会背景が大きく影響している。シングルマザーの世帯数は約124万世帯で、そのうちの約80%が離婚を経験し一人での子育てを選んでいる。しかし、「夫婦そろって子育てをするもの」という意識が強い日本では、まだまだ生活しづらい面が多いようである。

年齢別の離婚率をみると、20代、30代が最も高く、幼い子供を持つ家庭の離婚が多いのではないかと想像できる。都市部では、孤独な子育て（孤育て世帯）が増え、夫や親族の協力も得られず、核家族化や少子化が進んでいる中で起きている社会問題といえる。離婚後に頼れる家族もいない母親が、母子シェルターに身を寄せ、将来への不安を抱えながら働けない状態にある人もいる。この例から、女性は、離婚後、経済的な面、住宅面で不安定な状況に陥りやすいこともわかる。

ひとり親家庭の就業状況

雇用者のうち非正規雇用：母子世帯 57.0% 父子世帯 12.9%

子供の進学率：母子世帯・父子世帯…高校等 93.9%、大学等 23.9%（+専修学校等 41.7%）

全世帯……………高校等 96.5%、大学等 53.7%（+専修学校等 70.7%）

（厚生労働省のデータ）

このデータを見ると、ひとり親世帯の大学進学率は、全世帯の半分程度に止まっていることから、経済的な面で、大学への進学を諦めるケースが多いことがうかがえる。

■困っている人の情報

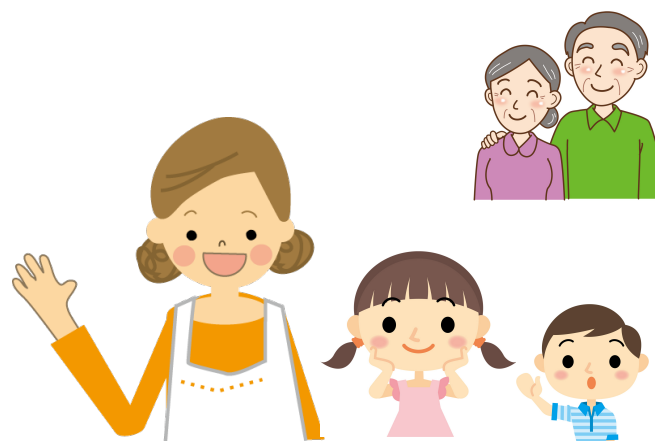
年齢：38歳

性別：女性

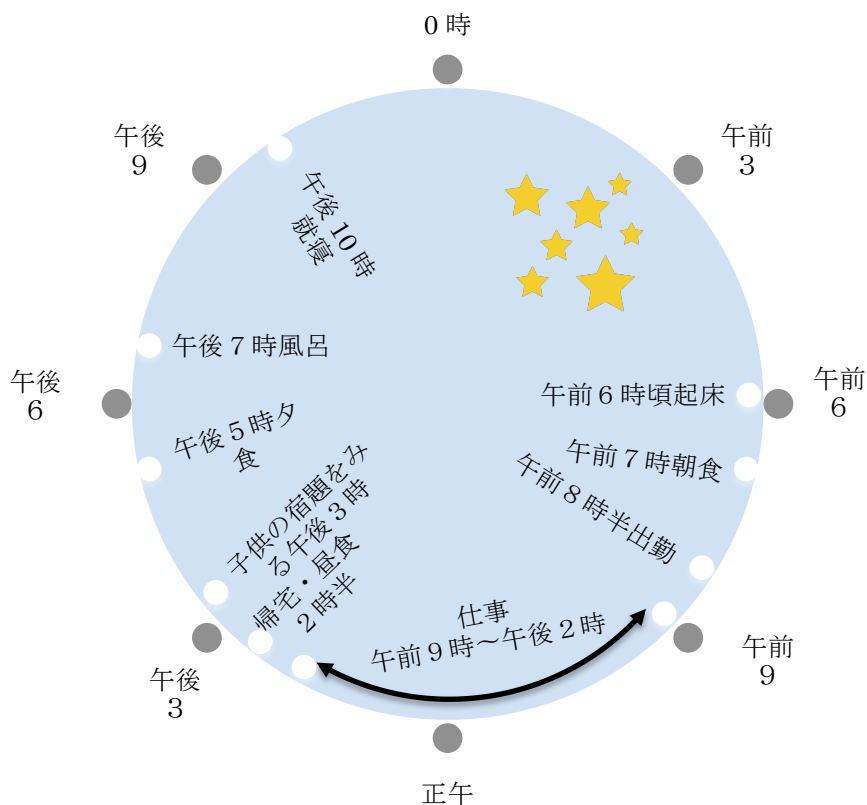
家族構成：母+娘（11歳）+息子（9歳）

援助してくれる人：実の両親

仕事：食品会社のパート職員



彼女の1日のスケジュール



仕事：土日祝祭日は休み

困っていること：

＊地域の仕事

今年、自治会の組長になり、回覧板を回す、会合に出席、様々な集金、お祭りの運営・準備などに手が取られている。こういった場では男性が主に活動していることが多いので、女性である彼女が自治会の仕事をするのを億劫に感じている。地域の仕事は毎年順番で役が回ってくるので、断れない状態である。仕事をしており、地域の仕事、家事、子育てを両立するのが大変困難なので、母子家庭は免除して欲しいと希望している。



＊子供の将来

彼女の最大の悩みは、子供の教育に関することである。彼女の近所の子供は小学生からみんな塾通いや習い事をしている。彼女の子供は、娘がピアノを習い、息子はスイミングスクールへ通っている。二人合わせて月に2万円かかっているが、本当は、塾にも通わせたい。公立高校に進学するとして50万円、大学で400万円くらい必要ではないかと考えている。しかし、現在、養育費をもらっているが、大学に行くまでの費用は、死に物狂いで働いても捻出できそうにないと頭を悩ましている。



＊子供が病気になった時

子供が熱を出した時、学校を休まなければならない、母親は仕事を早退、または、休まなければならないので、誰か預けて代わりに面倒を見てくれる人がいれば、助かる。急に仕事を休むと、会社に

迷惑がかかり、信頼が薄れる。給料の額にも影響が出てくるので、なるべく仕事は休みたくないとのことである。彼女の家から、車で15分ぐらいのところに実の両親が住んでいるため、両親の手が空いている時に子供の面倒を見てもらうことがある。



＊子供の寂しさ

母親一人で、父親役も担うのは大変。子供が、父親がいないと寂しいと覚えることがあるので、代わりに一緒に遊んでくれたり、時間を過ごしてくれる人が地域にいてほしい。放課後や休日の時間をもっと充実させたい。

■思い・ニーズを支えるサービス

＊事例紹介

「こども食堂」

近年、こどもの貧困を救う「こども食堂」が全国に広がりつつある。2012年ごろからこどもだけでも1人で立ち寄れる「こども食堂」の取り組みがスタートした。こどもの食問題が取りざたされている中で注目するのはこどもの貧困である。家庭が貧しく十分な食事ができない子はもちろん、1人でご飯を食べていた子、不登校の子など多くのこどもが集まってくる。



『要町あさやけ子ども食堂』の山田和夫さん(68)の場合は、自宅でパン屋を営んでいた妻を6年前に亡くし、その自宅を開放して2013年3月に食堂を開き、第1・3水曜日限定でオープンしている。1食300円で、毎回、多くの親子連れや子どもでにぎわっている。

食材の多くが思いに賛同した全国の農家や個人の方から無料で提供されたもの(余剰野菜)である。料理は近所の住民や大学生など大勢のボランティアが集まり、毎回みんなでわいわい作る。ボランティアだけでも14～15人ほど、さらにお客さんが40人ほど入り、またたく間に人でいっぱいになる。ここの食事は、愛情がたくさん詰まっていて、栄養たくさんのごはんを安心してお腹いっぱい食べられると話題。現在は首都圏だけでも30か所以上。関西、九州など全国でオープンしている。貧困に苦しむ方だけでなく、シングルマザーの母子や近所のおばちゃん、ただ楽しいから来る人もいれば、ふらりとサラリーマンも1人で立ち寄る。名前もそれぞれの事情も知らないが、狭いから必然的にお互い譲り合ったりして仲よくなれる場である。



今回、対象としている彼女も去年離婚を経験し、ひとり親となった。彼女の子供は、二人とも小学生であるが、学校が終わった後は、すぐに帰宅し、学童保育などの放課後サービスなどは利用していない。また、彼女の住む町は、開発されつつある住宅地域である。この地域には、新しい家を購入し、移り住んでくる世帯が多い。子供の年頃が同じであれば、学校での生徒の父兄との交流はあるが、近隣住民とは、顔を知っているくらいでほとんど付き合いはない。母子家庭の背景で述べた「孤育て」は必ずしもシングルマザーに限った問題ではない。今では、地縁のない家族が集まる都市特有の問題となりつつあるのである。戦前までは、三世代で暮らす家族が圧倒的に多く、祖父母や近所に住む人が子供の面倒を見るのはごく普通の習慣であった。しかし、戦後、核家族化が進むにつれ、子育ての負担が母親に大きくのしかかっている状況が深刻化している。そして、今や、子供の6人に1人が貧困に直面しているといわれる時代である。子供の貧困は、なかなか社会の目に届かないところで進行していることが多い。経済的貧困が直接の原因となり、子供への虐待になるケースが増加し、10年間で、2.7倍に増加したという報告がある。家庭の中で起こっている窮地におかれた子供の状況を見逃さないためにも、地域社会の目を家庭に届かせる必要があるのではないだろうか。ここで、母子の支援を中心に地域住民・教育機関・企業など地域における様々な人を巻き込み、新しい子育ての仕組みを作っていく必要がある。誰でも参加でき、誰もが楽しめることをコンセプトに、「孤育て」を「地域ぐるみの子育て」に変えていく地域コミュニティーを計画する。

ここに住んでいる私たちは、地域社会の一員である。誰もが、心地よいと感じる居場所づくりを目指す。みんなのご飯を作っているのは、近所の大人、大学生など。手伝いたい人みんなをつなげるのが、この「まちのホッとステーション」である。地域の子供を地域が見守り、学びや暮らしを支えるネットワークをつくり、こどもの未来を明るいものに変えていく。様々な居場所を通じて、信頼できる大人や若者につながったときこどもの人生は大きく変わる可能性があるだろう。

■地域で支援ができる人たち

- ＊定年で退職した人…様々なキャリアを持つ人。自分のキャリア・専門性を活かして、子育て支援に役立てる。例えば、お料理を得意とする人は、子供達に食事を作ってあげることができる。
 - ＊元気な高齢者……体不自由がなく、人のために何か役に立ちたいと思っている人。子育てのアドバイザーになることができる。
 - ＊大学……教育・研究機関として地域に貢献。
 - ＊大学生……地域に住む子供たちに勉強を教え、学力の向上を目指す。また、子供達は大学生と一緒に遊ぶことで、充実した放課後を持つことができる。
 - ＊企業……地域に根付いた企業として、地域に何らかの形で還元したいと希望している企業。子供の進学のために寄付をする。
 - ＊地域に住む外国人…地域に溶け込みやすくなる。
-

■住環境の提案

＊彼女の住むまち

彼女の住む地域の特性をみてる。彼女は、都市から少し離れた郊外に住んでいる。彼女の家から約 90m 北に進むと川があり、自然と触れあえる環境がある。また、周りには、数カ所であるが畑があり、のどかな風景が残っている。駅には徒歩 10 分ほどで着き、交通の便も大変便利である。この地域は、分譲住宅地で、建つ家は比較的新しい住宅が多い。高台になっている場所はまだ、空き地となっている敷地が多くあり、これから新しい世帯が移り住んでくることが予想される。また、近所には、シニア向けの共同住宅がある。自分の身の回りのことは人の手を借りなくてもまだ十分生活できる高齢者たちが、今後のことを考え、生活支援サービスなどがあるから安心として、移り住んでくるようである。さらに、周辺状況の聞き取り調査を進めると、川沿いに日本家屋の空き家があることがわかった。この空き家の敷地には広い庭があり、樹木も多い。草が敷地一面に生い茂り、樹木は手入れされずに枝が伸び放題である。しかし、ここは川向こうからも見晴らしが良く、人が活動している様子がよくわかる場所である。この死角とならない場所は、地域の住民が集まりやすい場所となるのではないだろうか。



対象敷地周辺図

＊「まちのホッとステーション」の計画

前述したように、彼女は仕事と家事を両立しながら子育てをしている。子供がまだ小さいことから、悩みを多く抱えているという。そのような悩みを少しでも軽減でき、居心地の良い場所。時には、彼女も 1 人で出かけたい時がある、そんな時、安心して子供を預けることができる場所を提供したい。また、ここの居場所は地域の人、偶然訪れる人にとっても楽しく、また来たいと思えるような場所でありたい。

「まちのホッとステーション」となる計画場所は川沿いにある空き家である。彼女の家から、空き家までは徒歩 1 分ほどで行くことができるので、子供が 1 人で歩くのも安全であり、親が送り迎えをする必要がない。近所のシニア向けの共同住宅からは、約 200m で徒歩 2 分の距離なので、この居場所に来ることが日常生活の一部となることが期待できる。このように、歩いて活動できる生活圏での地域における居場所づくりが、重要な鍵となると考える。この共同住宅には、新しく移り住んできた高齢者が多い。そのような、地縁のない人たちを地域社会に巻き込み、核家族で暮らす子供が、高齢者と触れ合う時間が持てるようになれば、祖父母の代わりとなる関係が生まれる。また、ここには、大学生、外国人、企業など様々な人を巻き込みたい。大学生には、ボランティアとして学習指導にあってもらい、外国人は語学教室を開いてもらう。いろいろな人が来るから、子供は大人に関心を持つようになるのではないだろうか。いろいろな人によって、育てられた子供は、成長した時、無意識に助け合いの意識が強くなっているはずである。

＊居場所づくりのキーポイント

- ・こどもが 1 人でも来ることができる場所
- ・ターゲットを絞らず、誰でも気兼ねなく来ることができる場所
- ・共働きの両親や仕事と家事の両立が大変なシングルマザーが、食事をしながら子育ての相談ができる場所
- ・頼りになる人に会える場所
- ・親に寄り添った苦労さや大変さが分かち合える場所
- ・旅で訪れた人が、また来たいと思えるような場所

＊活動内容

- ・月 2 回、食堂を開く。(子供無料、大人 300 円)
- ・雑木林を開拓し、畑をつくる。採れた野菜を調理し、食堂でふるまう。
- ・ボランティアを募集し、子供の見守り保育や学習指導、また自治会の仕事も手伝ってもらう。
- ・地域の企業から寄付を募る。(子供の教育費などとして)
- ・季節ごとのイベント

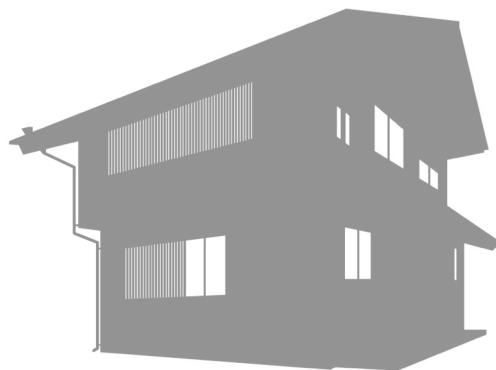
＊地域の資源活用

雑木林、空き家の所有者に交渉し、地域活動の場として安く貸してもらう。雑木林を開拓し、地域の畑として活用する。普通、畑は所有者以外入ることはできない。しかし、ここを地域の畑にすることで、誰でも入ることができるようになり、交流の場生まれる。野菜が育つにつれ、野菜ミュージアムのような場所になる。地域で共有する貴重な地域資源になる。

子どもの支援活動のイメージ図

空き家の活用

比較的大きな住宅で、庭がとても広い
ため、様々な活動をしやすい環境が
ある。また、見晴らしが良いため、人
の活動が見やすい。



高齢者とのふれあい

遊びを通じて高齢者と交流
することで、親しみを持つこ
とができる。



ボランティアによる学習指導・読み聞かせ

大学生を中心に、学習指導を行う。
小さい子供には、読み聞かせを行
う。



食堂

子供が参加できる活動をふ
やす。
月1回の食堂は、子供にも
料理を手伝う機会をつく
る。

資源活用のイメージ図

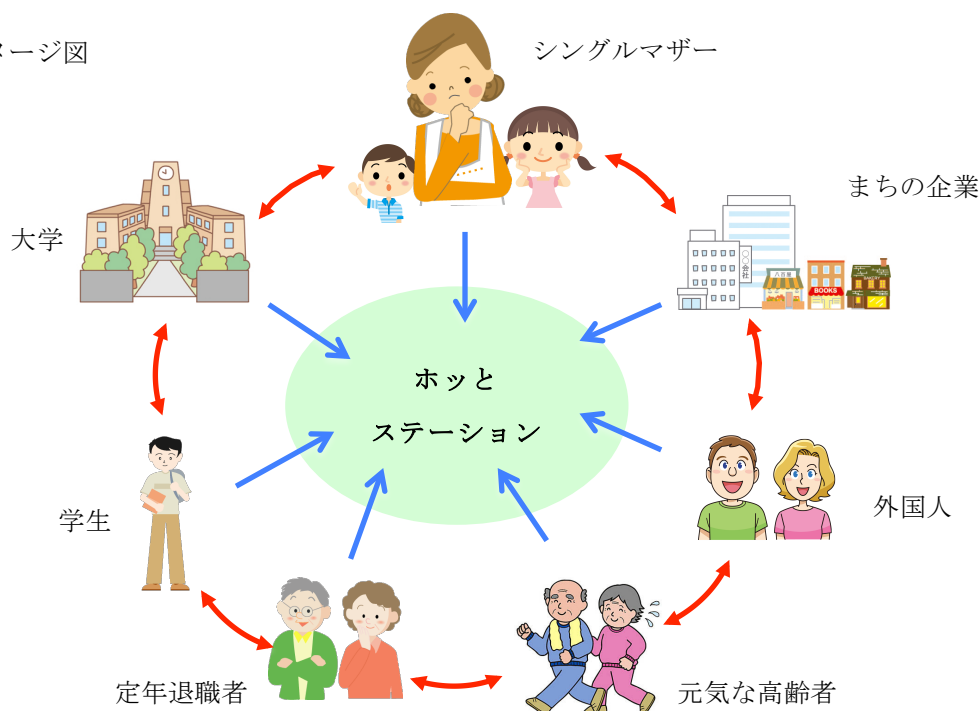


雑木林を開拓

雑木林を開拓し、地域住民が畑として利用する。畑で
採れた野菜や果物は、住民に分けられ、また、こども食
堂でも使われる。
大人が外で仕事をしているので、必然的に子どもの守
り活動にもなる。

＊助け合いが循環する仕組み

循環のイメージ図



例えば

大学

地域住民の協力を得やすくなる。地域に密着した研究をすることができる。

定年退職者

安く畑を借りて、作物を育てることができる。

シングルマザー

子育ての相談ができる。地域活動の仕事を手伝ってくれる人がある。子供の勉強を見てくれる人がある。

学生

地域で、ボランティア活動をすることができる。別の地域から来ている学生でも、地域につながりを持つことができる。

外国人

地域に溶け込みやすい環境であること。日本語を学べる機会を持てる。

元気な高齢者

独居の人でも、子供と触れ合える機会ができる。もっと高齢になった時、成長した子供に援助を求めやすい。

まちの企業

寄付により大学へ進学した子供たちが、将来、地域企業の優秀な働き手となることを期待できる。

■参考 HP

厚生労働省 『ひとり親家庭の現状について』 平成 27 年 4 月 20 日

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf> (2016.7.17 アクセス)

こども食堂ネットワーク

<http://kodomoshokudou-network.com> (2016.7.22 アクセス)

週刊女性プライム 2016 年 2 月 2 日号

http://www.jprime.jp/tv_net/nippon/23019 (2016.7.22 アクセス)